

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 13 日現在

機関番号：17601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K01524

研究課題名(和文)運動指導力向上のための模倣実習の授業開発

研究課題名(英文)Study on imitation of movement by physical education teacher

研究代表者

三輪 佳見(Miwa, Yoshimi)

宮崎大学・大学院教育学研究科・教授

研究者番号：00182064

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：児童生徒に運動を教えるためには、体育教師は子どもの動感を理解もしくは解釈しなければならない。児童生徒の動感を理解するための拠点は、体育教師がもっている自分自身の動感である。しかし、多くの場合、体育教師は自分自身の動感を意識しないまま運動技能を獲得している。つまり、運動をできるようになっても運動を教えるための基礎ができていないのである。

本研究では、体育教師を目指す学生に、子どもの運動を模倣させた。模倣するためには、学生は、自分自身の運動を子どもたちの動きの特質と類似させなければならない。動きを変えてみることによって、学生は自分自身の動感を感じとることができた。

研究成果の概要(英文)：To instruct a pupil in movement techniques, the physical education teacher has to understand or interpret a pupil's sense of movement ("Kinaesthesia" in Husserl's terms). The understanding of the pupil's "Kinaesthesia" is based on the "Kinaesthesia" of the physical education teacher. However, in many cases, the physical education teacher has gained motor skills, without being aware of his own "Kinaesthesia." In other words, even if movement execution becomes possible, there is no basis for instructing movement.

In this study, a student who aims to become a physical education teacher was made to imitate a child's movement. To imitate, the student had to make his movements similar to the special features of the pupil's form of movement. By changing the form of movement, the student was able to perceive his own "Kinaesthesia."

研究分野：スポーツ運動学 体育科教育

キーワード：運動指導 子どもの運動 教員養成

## 1. 研究開始当初の背景

小学校入学前の子どもたちは、「日常生活そのもののなかで行われる自由な、方法学上の指導のない習得」、つまり「自由習得」によって、走る、跳ぶ、投げる、捕るといったスポーツ運動系の基本形態とそれらの組合せを身に付ける(マイネル「スポーツ運動学」1981 Meinel,1960)。しかし、現代の社会においては、運動する機会が子どもに十分与えられているとはいえない。文部科学省の調査によれば、「4割を超える幼児の外遊びをする時間が1日1時間(60分)未満」であり、「活発に体を動かす遊びの機会は少なくなりがち」であるという(「幼児期運動指針ガイドブック」2012)。

このように体を動かす遊びの機会の減少は、単に運動量だけの問題にとどまらない。子どもは、小学校入学後の体育学習に必要な基本的な動きを身に付けることができない。さらに、スポーツの動きができないだけでなく、日常生活における動きについても、「かつては幼児期に身に付けていた動きが十分に獲得できておらず、その結果、自分の体の操作が未熟な幼児が増えている」ことも指摘されている。たとえば、「5歳児になっても、一段ごとに足を揃えなければ階段を降りられない幼児や、座らなければ靴を履き替えられない幼児がいる」のである(文部科学省, 上掲書 2012)。つまり、現代の生活様式の変化によって、スポーツの基本的な動きは言うまでもなく、日常的に身に付けていた動きも、子どもが学習できなくなってしまっている。また小学校入学後についても、小学校5年生を対象とした平成25年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果(文部科学省, 2014)によれば、男子の9.1%、女子の21.0%は、1週間の総運動時間が60分未満であり、しかも、そのうちほぼ半数の児童の運動時間は0分であるという。

こうした実態のなかで、生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現する資質や能力を育成するという、体育の目標を達成することは難しくなっているといえる。現代の子どもたちが抱える運動発達の問題は、単に運動する場を与えておけば解決できるというものではないし、そもそも「三つの間」が不足している社会環境をすぐに変えられるものでもない。したがって、子どもの自由習得に任せておくのではなく、親、保育者、教師といった大人が、子どもの運動習得に関わらなければならない。体育授業等の指導場面において、子どもの動き方の何に問題があるのか、とくに動きの感覚的な問題を即座に見抜き、子どもたちに適切な運動教材を提示したり、アドバイスしたりできるような実践的指導力が求められている。

しかし、子どもが「どう動こうとしているのか」、自分の動きを「どのように感じているのか」、子ども固有の感覚を読みとることは大人にとっては難しく、子どもと同じ目線

で指導することは困難である。なぜならば、大人は自分が子どものころの動きの感覚がどのようであったか、できなかったときとできるようになったときの感覚的な違いがどうであったか忘れていいるからである。たとえば、自分が立てるようになったとき、歩けるようになったときの感覚を呼び起こせる大人はいないであろう。たしかに、現職教員のなかには、子どもの動きを見抜くのに卓越した能力をもっている人もいる。しかし、それは教員養成のカリキュラムや研修プログラムで育てられたものではなく、本人の自得による。したがって、指導経験の少ない教員養成系学生は、子どもの動きを見抜く力が未熟なまま指導現場に立つことになってしまう。

このように運動の実践的指導力をいかに育成するべきかという問題意識をもって、今回の研究を着想した。

## 2. 研究の目的

子どもの動きの感覚を理解できることが指導者に求められるが、この能力を育てるための保健体育教員養成課程の実技授業の在り方を発生運動学の立場から検討し、新たな知見を提供することが本研究の目的である。

この目的を達成するために二つの課題に取り組む。

### (1) 子どもの運動問題の解明

子どもの動きの感覚を理解できるという能力を育てるためには、まず学生を指導する筆者自身が子どもの動きの感覚を理解していなければならない。そこで、発生運動学の現象学的立場で子どもの運動の事例を取り上げ、子どもの動感世界や発達レベルに適合した学習目標と学習の道筋をいかにして構成するのかという問題を明らかにする。

### (2) 模倣による代行分析

次に、保健体育教員を目指す学生を対象として、子どもの動きを「模倣」という内容を導入する。子どもの動きの模倣に取り組むのは、学生は「上手にできる」自分の動きを模倣するために変えなければならないからである。自己の身体と向き合い、自己の動きをどのように変えれば子どものような動きになるか感じとることが求められる。このような実習をとおして、学生の自己の動きに関する観察、さらに子どもの動きに関する観察にどのような変容が見られるか考察し、教員養成の授業内容として模倣実習が有効であるか明らかにする。

## 3. 研究の方法

### (1) 子どもの運動問題の把握と模倣実習教材の作成

はじめにどのような動きを模倣対象とするべきなのか検討しなければならない。子どもの動きの感覚を理解できるようになるために模倣してみるのであれば、そもそも子ども特有の動きとは何か、従来の運動発達の知

見及び先行研究に基づいて認識する。

次に平成 11 年度から筆者が指導している宮崎大学教育学部附属校スポーツ・体操教室の子どもを中心に、どのような情況のときに身体知が形態化されやすいのかという発生分析やどんな動き方を学ばせるのかという構造分析を実際の運動指導をとおして行う。この指導のなかで子どもの動きを撮影し、運動類型に基づいて子どもらしい動きを模倣対象として抽出する。

#### (2) 体育専攻学生による模倣実習の実践

体育専攻学生を対象に子どもの動きを模倣する実習を行う。模倣対象として選んだ動きに関して、はじめは模倣ではなく、子どもの前で「お手本」を示すつもり、つまり自分が良いと思うやり方で行うという課題を設定する。そして、この動きを行うために、どのようなことを意識したか、自身のコツやカンについて感じ取っていることを記述してもらい、言語で記述できない対象者には、筆者がインタビュー(借問)を行う。

次に、模倣対象の児童の動きを動画で観察して特徴を書き出す。そして、この特徴を示すように子どもの動きを実際に模倣し、真似るために本来の自分の動きをどのように変えたか振り返ってもらう。この場合も言語で記述できない対象者には、筆者が借問を行う。

しかし、外形的な運動経過の模倣に終わってしまうことも考えられるので、子どもに特徴的な動きを残したまま修正して実施するという課題も設定する。そして、自分が「お手本」を示すつもりで行うときと動きかたを変えることによって、動く感じを能動的にとらえられるか考察を進める。

### 4. 研究成果

#### (1) 子どもの運動の類型

発生運動学の促発分析においては、はじめに学習者の創発レディネスの査定を行う。レディネスを査定するためには、学習者は「どう動こうとしているのか」、自分の動きを「どのように感じているのか」、そもそも「動けるようになりたい」と思っているのか、「動きの感じに嫌な気はしない」のか、「嫌な感じがする」のはどういう状況かなど、学習者の運動の意味構造や動感志向性を読みとる動感素材分析が不可欠である。この観察と交信に基づく動感素材分析を通して学習者の創発レディネスを査定し、促発指導のための目当て形態と道しるべが構成化されるのである。しかし、幼児や児童を対象として指導する場合、言語能力の問題もあり、借問を手段として動感意識を交信することは困難である。

そこで、指導しようとする運動の構造分析に運動発達類型論的分析を加えた。このことによって、解決すべき運動問題をとらえ、子どもの創発レディネスを査定するのに適切な運動課題を設定できるようになった。

さらに、この運動課題を実行する子どもの動きを観察し、どうしてそう動くのか解釈するために交信が難しい場合にも、運動発達類型論的分析という手段を加えることによって、子どもの動きの発達レベルを明らかにすることができた。

#### (2) 模倣による代行分析の問題

教員養成課程の体育専攻学生にどのようにすれば身体移入能力を育成できるかという問題意識から本研究に取り組んだ。学生の身体移入経験として着目したのが模倣である。指導経験がなくても、自らうまくなるために、できる他者に動感移入し模倣を試みているはずである。そこで、本研究では多くの欠点をもった子どもの動きを真似てみることによって、子どもの動感地平に移入し、処方素材を分析させようとした。しかし、外形的な運動経過を似せることはできるが、子どもの類型の特徴ともいえる動きが何かはとらえられない。インサイドキックを例に挙げれば、脚を外旋させて振る経験がない子どもたちは、ボールを強く蹴り出そうとすると習慣化された脚の振り方に戻ってしまうのであり、その動きを感じ取らないと、子どもの目指す動きを代行することはできない。

こうした結果を受けて、子どもが実施した動きの模倣だけでなく、その動きを修正した目標像を呈示して実際にやってもらうことを付け加えた。剣道の面打ちでは踏み込む足を高く上げること、インサイドキックでは脚を大きく振り上げること、つまり大きな導入動作から打ったり蹴ったりするように動きを修正してもらった。それによって、自分が模範を示すようにしたときには気付かない動感を感じ取ることができた。

子どもの動きを真似ても外形的な似せ方になるだけで、動感移入の能力を育成することは難しい。ただ、すでに習得している竹刀の振り方やボールの蹴り方を異なる動きかたで実施してみることで、自己の動きをどう変えればうまく動けるか動機づけられ、隠れていた動感意識が呼び覚まされる。このことは動感スキップしたまま動けるようになった、あるいは子どものころの動感忘れてしまった学生たちが、子どもの動感地平を理解し、学習目標として適切な動感形態を呈示できるようになるための基礎づくりには有効であるといえる。

### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 18 件)

三輪佳見・西田英司・野邊麻衣子・高橋武大・高橋京子・中馬越恵美・高橋祥朗・駒松郁美・日高正博：幼小中連携によるベースボール型ゲームの一貫教育について、宮崎大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要 第 26 号、51 - 65 (2018) 査読無

三輪佳見・春山文香：模倣による代行分析

の問題性、伝承 17号、1-19(2017) 査読有

三輪佳見・野邊麻衣子・高橋武大・西田英司・高橋祥朗・馴松郁美・日高正博：小学校体育で育成すべきベースボール型ゲームの技能について、宮崎大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要 第25号、105-117(2017) 査読無

三輪佳見：運動学的視点から見た「短距離走・リレー」「ハードル走」の魅力と指導のポイント、楽しい体育の授業 335号、8-11(2017) 査読無

三輪佳見：体育授業のリスクマネジメント(10)、楽しい体育の授業 328号、66-67(2017) 査読無

三輪佳見：運動発達の類型に基づいた子どもの運動指導に関する研究、平成27年度筑波大学博士論文(2016) 査読有

三輪佳見・竹内理代・野邊麻衣子・西田英司・外園武志・相星貴洋・馴松郁美・日高正博：相手と対峙する動きの指導に関する研究-幼小中をつなげる学習内容-、宮崎大学教育文化学部附属教育実践総合センター研究紀要 第24号、109-122(2016) 査読無

三輪佳見：「小学校低学年から小中高の体育を見通す」ボールゲームの教材を考える、体育授業研究 19巻、51-54(2016) 査読無

三輪佳見：体育授業のリスクマネジメント(9)、楽しい体育の授業 327号、66-67(2016) 査読無

三輪佳見：指導内容の明確化・体系化と多様化を考える、体育科教育 第63巻 第12号、52-55(2015) 査読無

三輪佳見：学習のつながりと発展性を考える、体育科教育 第63巻 第11号、66-69(2015) 査読無

三輪佳見：逆上がりでは力強く踏み切ることが大切か?、体育科教育 第63巻 第10号、58-61(2015) 査読無

三輪佳見：どうやって走り出せばよいのか?、体育科教育 第63巻 第9号、66-69(2015) 査読無

三輪佳見：高跳びの踏み切り足はどちら側?、体育科教育 第63巻 第8号、62-65(2015) 査読無

三輪佳見：左右どちら側でやるとよいのか簡単には決められない、体育科教育 第63巻 第7号、62-65(2015) 査読無

三輪佳見：運動を繰り返すためには休みが必要、体育科教育 第63巻 第6号、62-65(2015) 査読無

三輪佳見：「ボールリフティング」は何の基本?、体育科教育 第63巻 第5号、63-67(2015) 査読無

三輪佳見：カスタネットでボールと出会う感じをつかむ、体育科教育 第63巻 第6号、74-77(2015) 査読無

[学会発表](計3件)

三輪佳見：子どもにとって正しい動きと

は?、日本体育学会第68回大会、2017年9月9日、静岡大学

三輪佳見：教職大学院における教科教育の在り方を探る、平成27年度日本教職大学院協会研究大会、2015年12月6日、一橋大学一橋講堂

三輪佳見：学習内容との関係を明確にしたボールゲームの教材づくり、第19回体育授業研究会、2015年8月7日、くまもと県民交流館パレア

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

三輪 佳見(MIWA YOSHIMI)

宮崎大学・大学院教育学研究科・教授

研究者番号：00182064